音韻規則の適用の分析－使用頻度と発話の速度による再範疇化の観点から－

西原哲雄（宮城教育大学）

英語の強勢の衝突を避けるための音韻規則として、有名なリズム規則（Rhythm Rule: RR）であるこの規則は様々な観点から、その適用の有無が説明されてきている。

例えば、Hayes (1989) では、同じ名詞句内にある［ Chinése díshes]NP は RR が適用されて［ Chínese díshes ］となるが、異なる名詞句に属する［Chinése] NP [díshes] NP は RR が適用されることはないと、統語的観点からの説明が可能であるとしながらも、Nespor & Vogel (1982) などで提唱されている音律音韻論（Prosodic Phonology: PP)では、先に述べた統語情報をもとにして構成される音律範疇（Prosodic Categories）の１つである音韻句（Phonological Phrase: PP）によっても説明が可能であるとして、前者の構造は１つの PP に属しているために RR が適用されるとし（ Chínese díshes)PP 、一方、後者は異なった PP に属しているとして、その適用が阻止されていると説明できるとしている（ Chinése)PP (díshes)PP。

しかし、Kaisse (1990) は Hayes (1984) の引用として、RR の適用が強強勢間の音節の長短でかつ、漸次的あるとして、いくつかの具体例を挙げている（Kaisse 1990: 136 を参照)。

また、Kaisse (1990) は Hayes (1984) の Appendix の引用として、強強勢間の音節の観点からではなく、実際の時間（actual time）によってその適用が説明できるとしている。(Kaisse 1990: 136 及び Hayes 1984: 70 を参照)。これらから、RR は音声的な条件によって、その適用が説明でき、漸次的（gradient）に適用されていることがわかる。

そして、Hammond (1999) はこれらの RR の漸次的適用を、先行する語（第一要素）の使用頻度によって、説明をしている。すなわち、先行する語が使用頻度の高い語は RR が適用しやすく（ ántique book)、使用頻度の低い語の場合は（ arcáne book)、適用されにくくなると指摘している。しかし、これらは、すべて規則の適用の有無の事実を単に説明しているだけで、なぜこのような漸次的な適用が起こるのか、という問題を説明していない。

そこで、本発表では、RR の適用範囲である PP の構築を使用頻度に基づく、発話速度による再構築の観点から説明を行うものである。すなわち、上記で述べた使用頻度の高い先行語と後続語の間の休止の長さは短く、使用頻度の低い先行語と後続語の間の休止は長くなるということから、前者は１つの PP を構成（ ántique book)PP する一方、後者は２つの PP を構成（ arcáne)PP (book)PP していると考えることによって、RR の適用の有無の漸次性を的確に説明できることを論証するとともに、語境界をまたいで適用される漸次的な英語の口蓋化規則についても、使用頻度によってその適用の度合いが異なってくるという事実(cf. Bush 2001）や使用頻度の高い語の曖昧母音の脱落率が、使用頻度の低い語の脱落よりも高い事実（cf. Hooper 1976）も、発話速度の観点からの音律範疇の構成の違いによる説明が可能であることも指摘する。

参考文献

Bush, N. (2001) “Frequency Effects and Word-Boundary Palatalization in English.” In J. Bybee & P. Hooper (eds.) *Frequency and the Emergence of Linguistic Structure*. Amsterdam: John Benjamins. 255-280

Hammond, M. (1999) “Lexical Frequency and Rhythm.” In M. Darnell et al. (eds.) *Functionalism and Formalism in Linguistics.* Amsterdam: John Benjamins. 329-358.

Hayes, B. (1989) “The Prosodic Hierarchy in Meter.” In P. Kiparsky & G. Youmans (eds.) *Phonetics and Phonology 1*. San Diego: Academic Press. 201-260.

Hayes, B. (1984) “The Phonology of Rhythm in English. “ *Linguistic Inquiry* 15, 33-74.

Hooper, J. (1976) “Word Frequency in Lexical Diffusion and the Source of Morphophonological Change.” In W. Christie (ed.) *Current Progress in Historical Linguistics*. Amsterdam: North Holland. 96-105.

Kaisse, E. (1990) “Towards a Typology of Postlexical Rules.” In S. Inkelas & D. Zec. (eds.) *The Phonology-Syntax Connection*. Chicago: Stanford: CSLI. 127-143.

Nespor, M. & I. Vogel. (1982) “Prosodic Domains of External Sandhi Rules.” In H. van der Hulst & N. Smith (eds.) *The Structure of Phonological Representation Part 1*. Dordrecht: Foris. 225-255.